

## 今も続く 洪水の危険と隣り合わせの生活

「実は4年前の平成10年にも姉川で床下浸水の被害が出ているんですよ。それも雨が上がり、4時間もたつてから堤防の下からの漏水によって起きたもの。野寺から河口まで姉川右岸(北側)の一部が水につかりました」と、びわ町消防団長の中川和司さんは言います。つい先日、日本列島を襲った台風6号、7号の雨のときも中川さんたちは泊まり込みで役場に待機して万が一に備えました。また、高時川の堤防沿いに住む同町の西邑孝太郎さんも「6号の雨のときは堤防の下から湧き水があり、役場と連絡をとりながら一日中警戒していました」と語ります。

今でも台風や豪雨があるたびに、地元の消防団の人たちが水防団として警戒に当たっています。

役場へは気象台から1時間おきにFAXによる情報が届き、いざとなれば携帯電話網で招集がかかります。

「びわ町の消防団(水防団)は団長、副団長の下に8つの部があり、それぞれの部に3〜5つの班があります。各地域から推薦された20歳以上55歳くらいまでの142名の団員で構成、二年に一回(来年から毎年)消防署の指導で訓練を重ねて緊急時に備えています。何しろ高時川は川の中に木や雑草が茂り、水かさが増したただけで木や雑草が水を引き止めて水位が一気に上がり、



▲台風6号(昭和50年8月23日)による姉川・高時川被害及び防災状況 [資料提供:びわ町]



堤防決壊の恐れがありますから、気が抜けません」(中川さん)

出動したときの水防作業は昔とあまり変わっていません。堤防が激流で削られないようにすること、漏水の箇所を補強することです。例えば、激流を緩めると同時に堤防が削られないようにする「木流し」、土嚢を半円形に積み重ね漏水箇所を囲む「月の輪」、堤防の亀裂の周囲に何本かの杭を打ち「縫い付ける」「五徳縫い」などです。(左下イラスト参照)

### 昔は中学生も

#### 水防作業に駆けつけた

こうした水防技術は先人たちが開発・定着させていたったものです。

昭和34年9月に日本を襲った超大型の伊勢湾台風は、滋賀県各地に大きな被害をもたらしました。このとき、現・浅井町助役の川地勲さんは高校生でした。「夕方からサイレンが鳴りつばなしてね。既に大人たちは堤防の水防作業に出っていましたので、残った私たちも中学生以上の男子は全員、草野川の堤防へ出動して木流しの作業につきました。上流から激流を大きな石がごろごろ流れてきて石と石が当たって起きるハラに響く低音の恐ろしさは体験した者しか分からないでしょう」川地さんたちは暴風雨が吹き荒れる中、命綱一本で流れの中に入っていく杭を打ちました。最も危険なのは上流から流れてくる木や石が体に当たること。当たればまず命はありません。仲間



▲網を編む正月行事(浅井町相模庭)



▲水防倉庫(浅井町相模庭) 水防倉庫の中には、木流し用の網・荒縄・土嚢・タコ・カケヤ・スコップ等が常に準備されています。

が見張りながら、その中で命がけの作業が続きました。また「コツは上流に背を向けて立つ事。上流に腹を向けると流されてしまいます」

余呉町の元消防団長・下谷與一さん(右)もこのとき、余呉川で「木流し」や土嚢で水防作業をしたと言います。

一方、高時川で西邑さんたちが取り組んだのは「シガラ」と呼ばれる水防作業でした。堤の流れに接する部分に杭を幾つか打っていき、そこに竹や木を交互に挟んでいきます。堤防が流れて削られないようにする伝統技術です。「若いころに小暮五郎という土木専門家に習ったものです。昭和50年の姉川大洪水のときも、これで流れてよりえぐり取られ、道路の舗装部分が底のように薄く残り、破堤寸前の堤防を決壊から守りました」

### 自分たちの地域は

#### 自分たちで守ろう!

こうした一連の水防活動で特徴的なのは、自分たちの地域は自分たちの手で共に力を合わせて守っていくという自主的な意志です。

「戦後間もなく『水防法』ができ消防団(水防団)などの組織が定められました。昭和40年ごろからです。伊勢湾台風の教訓で行政も本腰になったからです。」

それまでは、消防や水防は自発的なものでした。具体的には、地域住民が区長(今の自治会長)の指示のもとで動き、地域間の応援体制も自然にでき上がっていました。雨が降り続き、水かさが増すと、役員・自警団・総出の順で警戒や水防作業などの出動体制を組んだのです。地域の安全は自分たちで力を合わせて守るものだという意識込みによるものでした」(下谷さん)

「昭和50年8月の台風6号の時、私が堤防の斜面を下って川の水際に立った時、天端(堤防の最上部)が自分のヘソの位置でした。堤防を歩くのも恐ろしくなり、しゃがんでしまいました。その時堤防は地震の時のようにブルブルと震えていました。長時間の水防作業で全員ヘトヘトになりながらも『諦めては駄目だ』と再び作業につきました」(西邑さん)

かつては地域ごとに水防活動をする人々のために炊き出し用の大釜があり、どの家にも「がんどう(大きな鍋)」や「鳶口(棒の先に鉄のカギをつけた物)」などの水防用具があったものです。

相模庭(浅井町)では今でも「木流し」の木を固定するための「綱」を編むのが正月の行事になっています。数人がかりで3本の綱をより合わせ、直径15cm・長さ15mほどの太い綱を作ります。

今の水防活動は気象台からの情報を元に役所が指示を出し、水防団員を直接招集する形をとります。炊き出しなどを含めて家族が参加することがほとんどないため、洪水の恐ろしさや水防活動の苦勞・大切さを知る機会が少なくなっていました。

「より安全で住みやすい地域を作るために最も大切なのは、地域の人たちの『自分の地域は自分たちで守るんだ』という強い意志です。すべてはここから始まりますから。最近では水防に関心が薄れ気味ですが、もっと関心を持ってほしいですね」(川地さん)

▲中川 和司さん  
(なかがわ かずし)  
昭和29年びわ町生まれ。  
昭和54年びわ町消防団  
入団。  
平成14年よりびわ町消  
防団長。

▲下谷 與一さん  
(しもた よいち)  
昭和13年余呉町生まれ。  
昭和31年余呉町消防団  
入団。  
平成元年から平成13年  
まで余呉町消防団長。  
平成8年から平成12年  
まで(財)滋賀県消防協  
会副会長。

▲川地 勲さん  
(かわち いさお)  
昭和16年浅井町生まれ。  
昭和35年4月浅井町役  
場土木課に奉職。  
平成13年より助役、現  
在に至る。

▲西邑 孝太郎さん  
(にしむら こうたろう)  
大正9年びわ町生まれ。  
びわ町議会副議長、公害  
対策特別委員など歴任。

## 自分たちの安全は自分たちで守ろう!

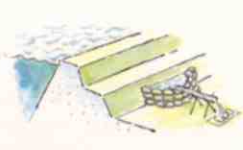
「最近、洪水の話が聞かないね」「これだけ技術が発達したんだから、もう洪水は起きないのでは?」……そう思う方がいらっしゃるかもしれません。しかし、事実はそうではありません。確かに、以前よりは安全になっていますが、今でも洪水の危険と隣り合わせの生活が続いているのは同じです。現在も、自分たちの手で川と共存する道を切り拓いてきた先人たちの心を引き継ぎ、日々水防の努力が重ねられています。関係者の方々にお話をおうかがいしました。

# 今も生き続ける 湖北の自主水防の伝統

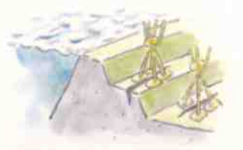
水防工法の紹介 水防工法には、越水防止や漏水防止など様々な状況に対応した工法が40以上あります。



木流し  
木の根の方を杭と網で堤防に固定し、枝の方を流れにつけて、激流を緩めると同時に堤防が削られないようにする。



月の輪  
土嚢を積んで河川水位と漏水口との水位差を高め水の圧力を弱め、漏水口が拡大するのを防ぎ、堤防の決壊を未然に防ぐ。



五徳縫い  
竹の弾力性を利用して、亀裂の拡大を防ぐ。



シガラ(柵:しがらみ)  
堤防の流れに接する部分に杭を打ち、そこに竹や木を交互に積み、堤防が削られないようにする。

[資料提供: 岐阜市土木部河川課]  
<http://lifelong.lifelong.city.gifu.jp/gyo8user/1034.htm>